

## 老年学 (Gerontology) の源流 (Ⅱ)

橋 覚 勝

### 4

中世と近世との臨界地帯については、従来甲論乙駁紛々として一定しないようであるが、一応両者の過渡期として **Renaissance** を設定することができる。この時期についてはいまさら贅言を要すまいが、実に近代思想の本質を明示する二つの要因をそだててくれた。その一つは意識的にギリシャ的観想を復活し理解せんとしたこと、いま一つは自然研究の態度方法を育成しようとしたことであった。尤もこれら両者は決して矛盾相剋するものではなく、むしろ時代思潮として必然的な文化開発の土壌に、共通の素因をもって発芽したものと考えることができる。

すなわち中世の宗教的桎梏に自由をうばわれた文化構造はその躍動を開始して、いたるところに固陋な出世間的宗教的文明のほか、世間的文明が人間乃至は民族精神のなかから開発せられ、学問は神学のほかに自然および人間を経験と理性とによって理解せんとする哲学が生れた。この世界観の「二重の真理」、いいかえれば超越的世界観と経験的世界観との交錯並存を復興期は中世末期からうけついたのである。哲学は宗教からそして神学から離脱して、自由に奔放に知識のあたらしい形式、あたらしい内容を追求せんとしたのである。いわゆる近世的パイオニアとしてのヒューマニズムであり、ギリシャ精神の人文主義的再興であった。<sup>1</sup>

かくして14世紀、15世紀の思想は、キリスト教僧堂主義 (monasticism) とスコラの啓蒙主義 (scholasticism) と人文主義 (humanism) との三者鼎立のかたちとなり、当時すでに学問の殿堂たる大学が開設せられながら、これら三つのイイズムのうちもしもその一つが強大な勢力を獲得することにでもなれば、ただちに大学の学問的雰囲気や研究的立場を不合理なものにするという困難があった。けだし文献によれば当時(14世紀)ヨーロッパは強烈な悪疫の流行と老若男女の斃死にみまわれ、その犠牲者は堂に満つという惨状で、所詮天啓にまっぴとまはなかったといえる。Padua 大学に医学部のコースが新設せられ、Napoli 大学が Salerno を圧したのはこの頃であった。かくして復興期は一面大学から発足したとも考えられるが、他面さらに世間的文明として、航海術の発達による新大陸の発見、印刷術の発明による図書資料の公刊、宗教改革による新興宗教の宣布など、欧州の各国は新しい文化の黎明をむかえたのである。青年の潑刺たる情熱や希望は、いまや剣や楯をすてて大学の卒業証書をもつことにむけられ、

medical humanist として医学を Galen や Avicenna から解放して、むしろ Hippocrates はじめギリシャの古典やあたらしい人文を、心ひろく体ゆたかに研究しようとするありさまであった。

注

(1) 安倍能成 西洋近世哲学史 大正6年 p. 6—7

## 5.

この時代に輩出した老年研究の第一人者として、イタリアの Gabriele Zerbi (1468—1505)<sup>1</sup> をあげることができる。1489年に Gerontocomica, Scilicet de Senum Cura atque Victu (Gerontocomica, Concerning the Care of the Aged and the Way of Living) を物したことは既述のとおりである。当時<sup>2</sup>はすでに Leonardo da Vinci が文芸復興に貢献した時代であり、また Michelangelo, Copernicus らによって芸術、科学に一段の躍進をしめそうとしたときであり、さらに Vatican 図書館が創立せられた時代でもあった。

彼は1468年に Verona の附近に生れた。Padua および Venice で医を開業しながら、Padua, Bologna 大学で医学および哲学を講じ、後 Rome 大学に招かれて医学の教授として、医学史の講義を担当したこともあったという。上掲著書は R. Bacon や他の学究の著書と同じく先蹤に依存したものであるが、当時の老年研究の著名な専門医の書きおろしといっても差支えない。老化期ならびに老衰期の衛生一般についてゆたかな情報をふくみ、アラビア医学の粹を要約して、星占術の影響について関説しているが、Zeman (1945) のいうように、老化の医学的特性を当時の知識をもって明確に語って余蘊なきものであろう。すなわち老年問題への事実的接近であり、André du Laurens (1558—1609) のごとき16世紀の専門家の研究態度の更新と建設に反映したものだともいわれている。ちなみに Laurens は Laurentius の名でよく知られ、フランス語で老年医学に関する最初の一書をものした専門家であった。彼は老年の問題について研究するために、特に老人検屍によってはじめて老化の病理学的考察をおこない、その一例として心臓は50才までその容積を増し、その後次第に減少すること、そしてその重量は高年者も年少者も変らないことを確認したという<sup>3</sup>。

上掲 Gerontocomica のプロローグにおいて、彼は Galen の構想を評論し、一般に老年病と目される300余種の疾病について詳解している。勿論これらの老性疾患に関する解説評述は、その臨床的側面についての Hippocrates の記述に負うところ多く、それに照合することによってなされたものであった。つづく57章では、老化衰頹に対するいろいろな方策が概説せられた。まず30才乃至60才の期間を老年期の前駆、いわば老化期、60才以後を真の老令期とし、老

## 老年学 (Gerontology) の源流 (I)

化の原因や特性、人間の寿命と星占術の影響、老人ホームの適切な場所、健康の管理、さらに巷間流行の非科学的な療法などが説かれているところから、一面星占術的妄信や奇怪な療法もむやみに貶することをしないと同時に、他面若干科学的な老化原因の追求や健康管理の方策が考察されるとともに、老人ホーム建設の企画も考案せられたようで、この頃についてようやく欧州とくにイタリアにおいて、老人ホームが衛生的な見地から問題になったことがわかるのである。そして最後の章では「死の不可避なこと」が論ぜられ、彼自身も「老年は人間の避くべからざる運命であるが、その最後はさだかではない」と告白し、ただ Galen の構想の線にそって、老年に関する研究成果を実践することによってのみ、老年の自然的変化をのぼすことができると断言しているのである。

Zerbi が比較的早世したことについては次のようなエピソードがある。彼の令名は赫々たるものがあつたがゆえに、Venice の共和制首領が、当時トルコの総督が水腫をわずらい、それを治癒するために適当な名医を推挙するよう依頼を受けたとき、首領は躊躇なく Zerbi を推した。そこで彼は子息とともにトルコへいった。総督の病患は療養とともに快方にむかったので、彼は大いに面目をほどこし揚々として帰国の途についた。ダルマチア旅行中に総督は急逝したが、その原因が注射の中毒によるとして総督代理は Zerbi を大いに追及し、ついに彼の面前で子息を殺害し、Zerbi 自身も殺されたという話がある。

とにかく Zerbi は当時の解剖学の権威として令名を馳せ、Paracelsus, Parè, Jerome Carden らの名外科医が踵をついで輩出し、病院も多く創設せられたという。

Luigi Cornaro (1464—1566)<sup>4</sup> は前掲 Zerbi と時を同じくして生れ、また同じ都市に居住し、しかも同じように老、長寿、死について研究をつづけながら、彼ら兩人の友好関係についてはなんらの記録もないのは不思議なことである。一は偶然の災厄にあって大成の途なかばにして死歿し、他は百才天寿を全うしたこと、また一は専門の医者でありながらなお超経験的な秘術を信仰し、他は専門外の立場から経験的な節制を実行したことなどから、親交の機会がなかったのではないかとも考えられる。

Cornaro は Venice の名門に生れ、百才長寿を全うした寿命的天才である。Venice の初期創設者の一員である Cornellii 家という古代ローマ時代からの伝統のある貴族の出身であるが、つとに Venice をはなれて Padua で生涯の大半をすごしたのである。この転住は家庭の黙認によるもので、貴族出身者という特権を喪失したがためである。すなわち彼はその当時の貴族の靡爛した不行跡な生活によって、元来脆弱な体質を一層弱めたからであった。35才にいたるまでに胃疾、疝痛、発熱、はげしい渴その他いろいろな悪疾になやまされたという。こういう不幸な身体の違和状態は、とくに飲食における不節制にもとづくものだと信じ、生活の態度や形式を一変して、むしろきびしい訓練によって健康の回復をはかろうとしたのである。勿論彼は専門の医者ではなかったのであるが、その健康法と訓練の結果については十分自信をもち、自分自身のみならず世人を啓蒙する意味で、健康長寿法について著述しようとしたのであった。

## 老年学 (Gerontology) の源流 (I)

彼は自分の健康法について計画をたてかつ実行にふみきってから約50年、それについて簡単な論文をかくべく決心した。彼自身の日頃の観察から知りえたものは、体質的に毎日12オンスの固形物と14オンスの液体——主として新鮮なワイン——が必要不可欠であるということであった。また極端な寒暑をさけること、そして過激な体操や運動を極力さけるべきことを知ったのである。『La Vita Sobria、(節制生活について)と題する小論は、全く彼の病気とその療法についての明快な彼自身の情緒的な告白であった。彼はつとに医者から『やりすぎ、をいましめられていたし、飲食物などは自分の体質にあうものを摂取すること、休息をとること、通風のよい室をしつらえ、極度に日光や風にあたることをさけることなどを実行し、生命の危機にさらされても、刺烙や下剤を使用することを警戒したのである。いわば1200年以前のGalenの筆法に準じたということが出来る。事実Galen自身も健康のすぐれざるゆえに厳格な日常生活の計画をたて、それを実行することによって長寿を保持したのであった。Cornaroの描いた自画像はいささか誇張的であり、家庭の生活様式、歌謡芸能や建築才能、著書などについての筆致は自負野心的なものが多分にあった。83才のときの創作『健康は高寿の基、(コメディ的なものといわれる)は世の注目と賞讃を博したものらしい。とにかく彼の文学的にして生活力の充満した筆硯風格はおどろくべきもので、たとい巧妙な自己中心的描写であっても、それは批評のかぎりではないといわれたものであった。その後二三の論説や注釈をかいたが、そのなかで人間の自然死は100才であり、長命は星占術的影響による。人間は土水火気の四要素から形成せられ、適度の食事は生来の湿潤を回復することだなどのべている。91才のときかいた最後の小論は彼自身の回想録とでもいうべきもので、『われわれ人間は男女をとわず中高年になるとしばしば過去の日をかえりみ、過去の記憶に心はおどる。生活の過程は精神的自我に日夜深刻な痕跡をのこし、この記憶のゆたかな経験は、未来の経験への期待や希望をうみだすであろう。われわれは所詮たしかに未来があるという命題にそむくことはできないだろう。かくして永遠の生命をつげる呪術師や予言者の言葉に耳を傾けることになり、その崇拜と信仰をよびおこすにちがいない。とのべている。彼は一面秩序と節度のある生活は、疾病の原因を除去する力をもつとのべる反面、それを憎悪しながらもいわゆる『Divine Sobriety、(信仰と節度)の残滓をぬぐいきれなかったのではなからうか。

要するにこの頃までに公刊せられた老年に関するあらゆる文献は、形而上学的にあらざるばGalen的な見解の変容に終始したのであって、すでにZerbiでさえ前述のようにその例にもれなかった。すなわち老年は不可避なもの、そして健康でありさえすれば、その不可避の運命の進攻をふせぐことができ、また若返りや延命の不自然な処置も講じられると説くのが一般であった。老年期の伝道者ともいわれるべきこのCornaroの偉大さは、実に老年に関する神秘を、老化とその疾病に影響する明確な経験的手段をあらわにすることによって排除した点にある。彼は錬金術的な『eau d'or、(gold water)や発禁的な療法を到底信ずることができなかった。当時流行の毒蛇の血や鉱水をまぜたようなものは、当然迷信に類する虚仮不実のもの

## 老年学 (Gerontology) の源流 (Ⅰ)

であったにちがいない。端的に言って彼は **life cycle** の特性をかえるような養生法に関する知識や慢性病予防についての方策を呈供したのであった。

老化の遅延と青春の保持に関するいわゆる妄言綺語の非現実性は、すでに中世の暗霧のなかに褪色したことであり、それかといって近代的刻印をもつカロリーの構想は、なお当時は一種の錯覚的印象をよびおこすものでしかなかったにちがいない。ただ **Cornaro** は健康への推称さるべき食事について、具体的にかつ現実的に指示したのである。

**Cornaro** の生活実践と研究論稿は、たしかに人間の健全な生活と長寿に適用さるべき具体的な方法を明示してくれたものであった。ただ彼の業績から **Galen** 式の健康法や星占術的療法との連関を一応みのがし、深い宗教的献身と軽い誇張的口述を片隅によせるとき、それは彼自身の暫定的な経験的発見であったといっても差支えなからう。時あたかも復興期の人文主義がとなえられ、世界はすでに人間への探求のまえに展望されつつあったからである。

彼の百才長寿を記念するために、筆者もつい語りすぎように思われる。この饒舌については一応陳謝しておく。

### 注

- (1) J. T. Freeman, *Medical Perspectives in Aging*, *The Gerontologist* Vol. 5, No.1, 1965 Part II, pp. 13-14
- (2) 拙稿老年学の源流(Ⅰ) 相愛女子大学研究論集 第14巻 昭和42年 13頁
- (3) A. H. Lawton, *The Historical Developments in the Biological Aspects of Aging and the Aged*, *The Gerontologist* Vol. 5, No. 1 1965, p. 28
- (4) J. T. Freeman, *op. cit.* pp. 14-16

## 6

17世紀は **William Shakespeare** の次の言葉とともに始ったといってよい。

「時と手に手をつないでながい道を歩いてきた。古いよい時代を抱きしめよう。(1602) なるほど16世紀後半から17世紀にかけて、文芸復興の絢爛たる時代ではあったが、**Elizabeth 1** 世当時のイギリスは、栄養も粗悪、衛生思想も低調、従って早老の傾向もいちじるしかった。その時代に **Shakespeare** は生きぬいたのである。従って彼の描いた老年は、病身であり非情な姿であった。彼にとっては40才もこれれば身体的にも精神的にも老人であった。勿論彼自身は老年に対する同情と理解とは決して吝かかでなかったし、晩年には大いに理想化したことであった。<sup>1</sup>

それはとにかくとして、**Elizabeth 1** 世、**Louis 14** 世、**Peter** 大帝、そしてこの **Shakespeare**、さらに **Rembrandt**、**Harvey**、**Galileo** ら、貴族、英雄、芸術家、科学者が綺羅星のごとく並んで頭角をあらわし、驚異的な仕事をさかしくもなしとげた時代であった。この時代に

Francis Bacon (1561—1626)<sup>2</sup> は生れたのである。

F. Bacon は一面は顯巨騎士として、他面は学者として二面的な生きかたをした。倫敦塔に程遠からぬテムス河畔の大家に生れたが、結局は彼の失意時代の数日しか住まなかったという。Elizabeth 1世の courtier であり、James 1世の adviser でもあり、後嚴父と同じように大英帝国の尚書ともなった。その後偶然の失敗によって惜しくもその地位を去ったのである。他面ケンブリッジの Trinity College を卒業とともに、barrister の称号を獲得した彼は、なんとか令名をかちえようと心がけるとともに、その空想を抱擁してくれる宏遠な世界、その活動を約束してくれる広大な舞台を見だそうとした。36才前後にして名論文10篇を続刊し、それにつづいて Advancement of Learning (1605)、Novum Organon (1620)、さらに Historia Vitae et Mortis (1623) を完成した。彼の偉大な計画は、Instauratio Magna、(大革新)であり、それによって、The order of nature and error of man、(自然の秩序と人間の謬見)を知ろうとしたのであって、まさしく人間を凋落にみちびくような自然および人間の謬見から、あたらしく発足せねばならぬと感じたからであった。いわゆる、Baconian、という尊称は、スコラ哲学の不毛を知り、あくまで経験的実証的研究への途をいったものであろうが、透徹した頭脳をもって、実験によってあらゆる可能性を実現し闡明するにあったといえる。なるほど彼の手がふれるところ、その様相はただちに一変するというありさまであった。

老年に関する F. Bacon の劣作、Historia Vitae et Mortis (生と死の歴史) は、生と死そして老化についての実証的認識の探求にあった。すなわち真理を知ることそしてそれを信じ行ずることは、人間にとってもっとも必要なことでなければならなかった。彼は老年について多くの事実を知った。そのうちの二、三をあげてみよう。

- (1) 老年における組織の修理は十分に行われない。
- (2) 死は内部の精力の喪失とその回復の不可能による。
- (3) 年をとるということは、日時の経過以外の何ものでもない。……そして老化の兆候は身体の乾燥によっておこる。

そして彼は適度の運動、適切な栄養、身体の冷却は、三位一体として生命保持に不可欠のもので、あたかも Cornaro と同じように万事節度をまもることが最善なりと信じた。とくに摂食の節制はなにより必要であり、運動も勿論必要不可欠であるが、過度の運動は長寿には有害であり、女性が男性に比して長命であることは、女性の生活々動がその中庸をえているからだと思われつつある。

Bacon 自身いずれかといえばヒポコンデリであり、有害な薬品の常用者として、時にはそれについて彼としては愚説を開陳しているが、老年の衛生に関しては完全な計画を提案した。すなわち新鮮な空気、十分な睡眠、節度のある摂食、快適な活動、少年時代の幸福な追憶が必要なこと、さらに極端な生活環境の変化をさけること、そして慎重に諸事に対処することなど

## 老年学 (Gerontology) の源流 (Ⅰ)

を主張し、また年令を蔑視してはならないといっている。ただ老年に関して語っているところは、いわゆる **Baconian** といわれるにはあまりに脆弱なものではないといえる。けだし老年の問題に関するかぎり、経験的な実証性に欠けていたのである。

とにかく時代思潮としてのヒューマニズムの立場にたって、人間不可避の問題に挑戦しようとするとき、科学者としての研究の限度をみとめないわけにはいかぬことは当然であり、そういう寛大な意味で、いかに言葉をつくろうとも、老年に対するこの **Bacon** の労作 *“The History of Life and Death”* にまさる言葉は他にもとめることは困難であろう。

**F. Bacon**が病死した頃、**Vesalius** は解剖学で名をなしたのにつづいて、細菌学、組織学そして生化学と基礎医学がさかんになった半面、**Sydenham** は臨床の方面で大いに活躍したのであるが、かくして老年に関しても、あたらしい18世紀の曙光とともに、多くの研究があらわれた。ここに紹介する **John Floyer** (1649—1734)<sup>4</sup> はその一人として、イギリスの **Lichfield** に生れ、**Oxford** 大学の医学部で勉強した。当時の医学教育はあまり適切なものでなく、いわゆる欽定講座と称せられたものが行われ、教授の **William Osler** は一週二回教壇にたって、**Hippocrates, Galen** に関する講義をするにすぎなかったという。

しかし **Floyer** は善良忠実なクラシカルな学徒であり、**Galen** 医学の強い傾向を習得したが、勿論彼は他の碩学の講筵にも列席したのである。卒業後郷里へかえり、そこで終生医を開業したという話である。その間彼は王室に仕えたこともあり、**James 2**世に忠誠をつくしたといわれる。**Floyer** の嚆矢によって **James 2**世の側近となった友人の **Dr. Samuel Johnson** は、ともに不幸にして喘息患者であったがために、**Floyer** は気腫についての病理図と呼吸についての実験結果につけ加えて、喘息についての著述をこころみ、しかもこれは **Johnson** の父君によって出版せられたという話もある。

彼の医学研究の経歴はそれほど長くかつ深いものではなかったが、脈膊計を発明して血量やその移流を正確に測定しようと試みたり、また冷水浴の効果を称揚したりした。彼はまた生物学的病理を熱心に研究し、その一例として気腫に関する卓見の基盤をなした牝馬の呼吸困難についての観察をあげることができる。*“彼の著作は彼独自の思想と熱心な探究心を示したものだ、と郷党の賞讃を博したことも、決して偶然ではなかったといえよう。”*

彼の *“Medicina Gerocomica, or the Galenic Art of Preserving Old Men’s Health”* は1724にロンドンで出版せられ、好評嘖々版を重ねるとともに翻訳もなされた。観察眼はとくに新鮮奇抜とはいえないが、その表題と内容の特殊性とは、この冊子をして老年に関する科学的研究の道標たらしめたのである。もっともこの表題に示すところはきわめて限定せられたものにちがいない。附録に彼は塗膏(塗油)の使用についてそれを勧奨したり、青春保持のための摂生についての書簡をつけ加えたりしている。要は老年に関する伝統的観想をくりかえしながら、彼自身の日々の臨床診断においてなされた特別の観察が、老年病処置の療法として呈供せられているのである。なおこの **Floyer** の著述が、アメリカの老年病研究に影響したこ

とは特筆すべきことであろう。たとえば Benjamin Franklin (1706に Boston に生る) は、老年に関して一書をものした最初のアメリカ人といわれる Cotton Mather (1663に生る) がよくいった言葉、<sup>4</sup>病気に対する最強力の防塞は禁欲の美德である、ということは、いますこし補遺さるべきだと忠言したといわれ、また Benjamin Rush (1745—1813) は *Account of the State of the Body and Mind in Old Age, With Observation of its Diseases and their Remedies*、と題して、老人の生理について発表したという。<sup>5</sup>

とにかく17世紀、18世紀は周知のとおり近代科学の興隆の時代であり、多くの著名の科学者の輩出をみた時期である。就中生物学の領域においては、Vesalius の解剖学をはじめ、Harvey の生理学、Leeuwenhoek の細菌学、Linnaeus の植物分類学、Bichat の組織学など一連の生物学者が続出したのであった。これらの人々の研究をみれば old age の問題について多かれ少なかれ応分の関心をもったことがわかる。生物の成長発達または病理疾患についていろいろ語りながら、人間の生と死について考えたり、長寿の栄光について喜んだり、また動物の寿命を数えたりしていたのである。人間や他の動物における百才長寿に関する研究的興味が澎湃としておこってきたのも宜なるかなであるといえる。

1817年に出版せられた Anthony Carlisle の *An Essay on the Disorders of Old Age*、<sup>6</sup>は、さらに *On the Means for Prolonging Human Life*、と付け加えられているから、老年病を克服して長寿延命の処方をといたものといってよい。実はこの単行本は筆者がすでに約40年以前、老年期の研究をはじめた頃、ある古書肆で買いいれた珍本(?)である。著者はイギリスの Royal Academy の解剖学の教授であり、同時にロンドンの Royal College of Surgeons の解剖学および外科の教授であったとすれば、当時は相当傾聴にあたいしたものであったにちがいない。いわゆるイギリス近世の Baconian の系統を引いたものであり、Floyer の *Medicina Gerocomicæ*、の影響を多分にうけたものであろうが、しかし内容から推して、むしろ前掲イタリアの Cornaro の *La Vita Sobria*、に類したのではないと思われる。

この書は老年病および長命法に関して、大学で行った彼自身の講演乃至は講義を整理したものである。すなわち開巻当初に「本書は主として相当な年輩の人々に対する講演を録したもので、実は長寿保持のための年少の頃からの摂生の道程を詳論したのではない、と辯じている。いわば高年者大衆——といっても Royal College of Surgeons の職員を対象としている——に対して、老年期における摂食の問題を中心に、衣服、住居などについて諄々と説いたもので、特に飲食物については、歯牙の弱化和脱落、胃腸、肝臓、心臓などの障害に対処して、きわめて具体的にその良否を点検選択するとともに、その節度を語っている。そして最後には外科医として、高年期における外科的手術の功罪を懇切に説明しているのである。勿論いづれかといえば啓蒙書の域をでないものであることはたしかである。

当イギリスにおいては、17世紀の間に二つの養育院が設営せられていたらしいが、18世紀にいたって、アメリカ東部においても Philadelphia によく public home, poor farm ある



## 老年学 (Gerontology) の源流 (I)

いは *asylum* として英国風の養育院 (Armshouse) があたらしく建設せられ<sup>7</sup>, 1730年頃に煉瓦造りのものが完工したのであるが, 1770年に増改築なって, 新装の養育院ができたということである。実はすでに18世紀の始め頃 *Secretarian Friend's Armshouse* が造営せられ, 生活困窮者, 老人, 棄児, 精神異常者, 病者などが収容せられていたともいう。けだし上述したところがアメリカにおける養育院設営の歴史であり, それが近來の *Philadelphia* 一般病院へ発展した経緯ということが出来る。

### 注

- (1) I. W. Draper, *Shakespeare's Attitude towards Old Age*, *Journ. of Gerontology*, Vol. 1, No.1, 1946, pp. 118—125
- (2) J. T. Freeman, *Medical Perspectives in Aging*, *The Gerontologist*, Vol. 5, No.1. Part II, pp. 16—18.
- (3) Francis Bacon, *Historia Vitae et Mortis*, の英訳である。
- (4) J. T. Freeman. *op. cit.* pp. 19—20
- (5) W. R. Miles, *Human Personality and Perpetuity*, p.36, A. F. Lawton, *The Historical Developments in the Biological Aspects of Aging*, p. 27, とともに上記のとおり, *The Gerontologist*, Vol. 5, No. 1. 1965に掲載されている。
- (6) A. Carlisle, *An Essay on the Disorders of Old Age*, 1817.
- (7) O. A. Randall, *Some Historical Developments of Social Welfare Aspects of Aging*, *The Gerontologist*. Vol.5, No. 1, 1965, Part, II p. 41.

## 7

A. F. Lawton は老年に関する近代的研究の発展について, 三つの時期を設定して

第 1 期	1835—1918	研究の初期
第 2 期	1918—1940	組織的研究の開始期
第 3 期	1946 以降	研究の発展拡充の時期

としている。この区分の理論的根拠は、彼の論稿のかぎりでは判明しないが、筆者の考えるところでは、19世紀に入って *biology*、という言葉がはじめてとなえられたことによって、生物学と医学との界線が一応明瞭になった頃から第1期が始まり (*Treviranus, Biologie oder die Philosophie der lebenden Natur, 1837*)、*geriatrics*、という言葉が *Nasher* によって一般的にようやく知らされた頃 (*L. Nasher, Geriatrics, 1916*) までを一応いったものと思われる (さらに *H. Schlesinger* は1914年に *Die Krankheiten des höheren Lebensalters* を出版した)。第2期すなわち今世紀前半は、*geriatrics* として医学的考察が組織的におこなわれた時期、そして第3期は *geriatrics* から *gerontology* へ展開した時期ということが出来るであろう。なお厳密に言えば第2期から第3期にかけて、単に *old age* の研究のみならず、*aging* と

## 老年学 (Gerontology) の源流 (I)

いう概念の科学的自覚によって、その過程および本質、そしてさらにその原因が究明されねばならないことがとなえだされた時期だともいい得る。また W. R. Miles の言葉<sup>2</sup>を借用すれば19世紀は Senectitude (老年期) の発見にはじまったということもできる。Senectitude の発見は当然人間を如何にして老と死からまもることができるかということが、まず科学的に研究されねばならないのであって、それについて生物学乃至は生理学の方面からの研究が大いにさかんになったのであるが、かかる業績はおのずから現代につながるものとして、aging に関する究明とともに稿をあらためて考察することとし、ここでは筆者の新知識として、19世紀のあいだ生きぬいたフランスの Charcot の業績をあげるにとどめておきたいと思う。Jean-Martin Charcot (1825—1893)<sup>3</sup> について語る場合、彼の名とつながる病院のことを記述しないで語ることはできないであろう。La Salpêtrière は3世紀にわたる長いあいだ、養老院であったと同時に精神神経科病院であった。それは1656年に勅令によってパリの貧窮無頼の徒、精神病者、老人などの救護所として創立せられ、それがやがて病院、養老院となったのである。1870年前後普仏戦争のあいだ、彼はそこで臨床的研究をつづけ、ついに神経科の最初の教授の椅子を獲得した。彼はつねに次のように考えていた。『現在の臨床医学の実践は真の解剖学をもっていない。単に借りものを適用しているにすぎぬ。医者は病理学者であることによつてのみ、良き臨床家である、と。

彼はつとに老年に興味をもち、1862—1870年のあいだ老年病、慢性疾患、神経錯乱に関する講義をしたこともあり、また研究もおこたらなかった。彼は老年疾患のなかには、究極の病理像把握のためには長期の潜在性をみとめねばならないこと、従つて往々にして誤診にみちびくおそれがあることを知り、体温測定が老年病診断に不可欠であることを見だしたのである。彼の『Clinical Lectures on the Diseases of Old Age』(L. Hunt によつて英訳せられ、Loomis が若干補遺して1881年に出版せられた)の原著はすでに1867年に公刊せられた。その講義は老年の病理からはじまり、痛風、関節炎についてそれぞれ数章をついやし、体温とその測定法については附録としてつけ加えられている。そして緒言において、

『今日から始める講義は、老年の病理について成人のそれと区別すべき一般的特性を知らしめること、そして老人の診察に際して特に経験する老性疾患に対して、注意せねばならないことを周知させるものである、

と語っている。Charcot は『ideas は facts より頑固だ、という過去の医学、すなわち Hippocrates より Galen を経て Francis Bacon にいたる医学の趨勢を知悉し、前世紀の老年期に関する大部分の医学的労作は、いわば Cicero の『De Senectute』を敷衍したものにすぎないと喝破し、積極的な定説をたてるためには病理的事実の発見と集積以外にはないことを強調した。単なる兆候の研究をこえて、解剖学、生理学、病理学の急激な発達による事実の蓄積と病因の発見によつて、医学界に一大革命のおこることを予言したのであった。

## 老年学 (Gerontology) の源流 (I)

以上前回より引きつづいて「老年学の源流」について考察した。稿はこれについでいわば現代の動向について語ることになるであろうが、これはあらためて筆を起すことにする。実のところ源流というにはあまりに近代を語りすぎた感がないでもないが、一応19世紀の問題まで言及した。そして前稿では筆者のいうように大胆にもわが国の老人観、養老道と対照し、私自身も大いに興味をもって考察した。ところで明治以後殊にその初期に関しては、遺憾ながらわが国の資料は筆者の手許になく、いまにいたるまで考察もおこたっていた。けだし歴史家の言をかりるならば、明治維新以来政治、経済、社会、教育の諸方面で空前の大改革と大建設がおこなわれ、文明開化、殖産興業などすべて外国の学問、技術の移植翻訳に全力を傾倒するにあらざれば、改革による国内擾乱に寧日がなかったような世相であったのである。官私の大学も明治10年の頃にはその創設をみたのではあるが、教官の大部分は外国人であった状態である。教育は富国強兵のため、科学技術は国家資本のため、医学は軍陣のためのものであって、国民大衆のためのものではなく、むしろ民衆はあまりにも過重の負担に苦しんだのである。<sup>4</sup>そして自分自身の立身出世のためには粉骨の労もいとわぬ階層もあったにちがいない。とにかく養生道、養老道などは閑人の余技にもならなかったことと思う。従って今回の記述は前稿に比して片手落ちのものになってしまったのであるが、今後の渉獵にまつということで宥恕をねがうこととする。

実のところ前稿から引きつづいて、注解によって察知せられるとおり、<sup>5</sup> \*Perspectives in Aging、(The Gerontologist, Vol. 5, No.1 1965, Part II) に負うところ甚大である。同誌の内容は

Medical Perspectives in Aging……………J. T. Freeman  
The Historical Developments in the Biological Aspects  
of Aging and the Aged……………A. H. Lawton  
Human Personality and Perpetuity……………W. R. Miles  
Some Historical Developments of Social Welfare  
Aspects of Aging……………O. A. Randall

から成りたっているが、これらの諸論文を参酌し適宜整頓し、時にはそれらにちなむ他の文献も若干渉獵して作文したものであって、いわば紹介の域をでないが、それだけでもあながち無駄ではないと考えた次第である。なお古文献については、老年病学 (I) の尼子富士郎博士の論稿<sup>5</sup>も参照していただきたい。

### 注

- (1) A. F. Lawton, The Historical Developments in the Biological Aspects of Aging and the Aged, The Gerontologist, Vol. 5, No.1, 1965 p. 27
- (2) W. R. Miles, Human Personality and Perpetuity, The Gerontologist, Vol.5, No.1, 1965, p. 36

## 老年学 (Gerontology) の源流 (Ⅰ)

- (3) J. T. Freeman, *Medical Perspectives in Aging*, *The Gerontologist*, Vol. 5, No. 1, 1965, pp. 20–22
- (4) 中央公論社, 日本の歴史 20巻及び21巻からかく理解してかいた。
- (5) 尼子富士郎 老年病研究の発達とその文献 老年病学Ⅰ, 金原出版 昭和31年 9–18頁

(おことわり) 上記 *The Gerontologist* 所掲の4つの論文のうち, 第1の Freeman の論文が最も参考にせられたものであるが, 遺憾ながら非常に読みづらく, 従って筆者の不手際もあり, 正確に伝ええたかどうかはなはだ疑問である。さらに前論集14頁所掲の Oxford 辞典による字義註釈の項のうち, 廃語となったと記したところは, 筆者の不注意による誤りであることをあえて告白し, 読者の寛恕をえるとともに廃語云々の語句は削除していただきたい。